

2022年度イスラーム信賴学科研全体集会 参加報告
イスラーム信賴学全体集会：「対立と紛争のなかで、つなぐ」に参加して

日本学術振興会特別研究員 PD / 上智大学総合グローバル学部
鈴木 慶孝

2023年3月2日(木)に開催された「イスラーム信賴学シンポジウム：対立と紛争のなかで、つなぐ(於：東京外国語大学 AA 研)」に参加させて頂いた。シンポジウムでは、様々な時代と地域を事例としつつ、人々が紛争と対立に巻き込まれながらも、「つながり」を生み出し、それらを活かすことで複雑な事態に対処してきた様相が示されるとともに、その限界や今後の可能性が提示された。それらは私自身にとっても、自らの研究内容を捉え直す契機となるものだった。さらに全体討論では、辻先生によって、グローバル社会が捨象してきた「はざま」や「あいまいさ」のもつ力を再考する重要性が示された。辻先生が我々に投げかけてくれたものは、「分断」や「壁」の問題に直面する人類社会に対する、きわめて大きな示唆に満ちたものだった。あいまいさを許さず、二項対立的な分断社会を生きる我々にとっては、辻先生が述べられた「境界領域の生き方」は、人々との関係性や社会の捉え方を再考するための、きわめて有益なアプローチであった。全体での討議を通じて、時代や地域を問わずに通底する、人々が培ってきた「つながり」の重要性と可能性を再確認することができた、大変意義のあるシンポジウムであった。

また、ポスターセッションに参加させて頂いたことで、多くの研究者と議論を交わすことができた。本報告では、トルコがシリア難民を受け入れるさいの課題とともに、シリア難民がトルコ社会内で構築している「つながり」を紹介させて頂いた。本報告内容が、シンポジウムの趣旨である「つながり」に資するものであったならば幸いである。さらにポスターセッションでは、他分野・他領域の研究成果を同時に学ぶことができ、大きな刺激となった。コロナ禍では、オンラインを通じた学術交流が多かった。そのため、対面によって生じる現場の空気や、研究者間とのコミュニケーションによって生じる共感を通じて、社会との「つながり」を改めて感じることができた、有意義な時間であった。

最後になるが、企画展示「シビルダイアログ」では、学術の多様な社会貢献が示されていた。学術成果を、社会に広く還元することはきわめて重要である。とくに保育施設を中心とした学術貢献は、学術の柔軟性をより強く感じた。これらの試みが続けられることで、年代層や場所を問わずに、学術がより良い社会を形成するための力となることを、節に願っている。この度のシンポジウムに参加させて頂いたことで、大変大きな刺激を得ることができた。関係者の皆様方に、心から感謝申し上げたい。この度の経験や交流を励みとして、自らもまた研究活動に邁進していきたい。